

## 二神島 その歴史と民俗を訪ねて

——二神島調査と神奈川大学日本常民文化研究所——

日時 2017年12月9日(土) 13:00-17:30 会場 愛媛県松山市 松山市立子規記念博物館4階講堂  
調査報告

「二神島調査の経緯と新たな歴史発見」田上 繁(日本常民文化研究所所長)  
「中世二神氏と二神島」前田禎彦(日本常民文化研究所所員)  
「二神種章の歴史意識—「水軍の記憶」を編む—」関口博巨(日本常民文化研究所客員研究員)  
「二神島の墓石と供養」萬井良大(日本常民文化研究所客員研究員)  
「和船と洋式船—二神島豊田造船所の記録から—」昆 政明(日本常民文化研究所所員)

### パネルディスカッション：二神島調査の意義と展望

石野弥栄(愛媛大学非常勤講師)  
二神英臣(二神系譜研究会事務局長)  
豊田 渉(二神系譜研究会常任理事)  
田上 繁 前田禎彦 関口博巨 萬井良大 昆 政明

○司会 津田良樹(日本常民文化研究所客員研究員)

## 二神島調査と神奈川大学日本常民文化研究所

前田 禎彦

二神島は、愛媛県松山市の西海上、中島(忽那島)を中心とする忽那諸島に属する小さな島である。全国的には、ほとんど知られていない本当に小さな島なのであるが、この島が、かつて国際的な科学雑誌「ナショナル・ジオグラフィック National Geographic」(第141巻第5号、1972年)に紹介されたことはご存知だろうか。1971年の春と秋、記者のウィリアム・グレイヴス William Graves と、写真家のジェイムズ・L・スタンフィールド James L Stanfield が二神島に滞在し、島の人びととの暮らしの中から「日本の村に暮らす Living in a Japanese Village」と題する記事を書き上げた。それは、高度経済成長期も終わりを迎えようとする時期の、変貌しつつある二神島の“いま”を書きとどめた貴重な財産となっている。

その二神島に日本常民文化研究所(常民研)が関わることになったのは1950年代初めにまでさかのぼるが、その後、1982年に常民研が神奈川大学に招致されてからも、1982~85年(第1期)、1994~2002年(第2期)と調査がくり返されてきた。そして、2008年度からは、共同研究「瀬戸内海の歴史民俗」の一環として、改めて二神島の歴史・民俗をめぐる調査が本格的に再開された(第3期)。現在、その成果報告書が着々と刊行されつつある(論集『瀬戸内海の歴史民俗』、史料集『二神司朗家文書 中世文書・系図編』、資料集『二神島 葬送と墓の民俗 資料編』、『二神島 豊田造船所資料集』、そして新しい試みである写真資料集『島の写真帖』vol.1~3、2017年度末現在)。今回の常民文化研究講座は、それらのエッセンスを地元松山の方々に知っていただくため松山市で開催する



写真 1 会場風景

こととした。調査の経緯を振り返り、その成果を紹介するとともに、長年の現地調査でご協力くださった方々にも加わっていただき、二神島調査の意義と展望を一緒に考えてみるのが、その目的であった。

当日は、田上繁・前田禎彦・関口博巨・萬井良大・昆政明の順で常民研の所員・客員研究員による計 5 本の研究報告が行われた。

最初に、長年にわたり二神島調査に取り組んできた田上が、過去の調査の経緯を総括するとともに、現在進捗しつつある新たな古文書調査の成果について報告した。次に、江戸時代から二神村の庄屋を代々務めてきた二神家に伝来した古文書群「二神司朗家文書」（現在は常民研が所蔵している）を主な素材としながら、前田・関口が二神島・二神家の戦国時代・江戸時代の歴史について報告した。前田は、中世二神氏と伊予国の戦国大名河野氏との関わりを中心に、関口は、江戸時代中期、18 世紀後半に二神氏一族の歴史を探り、その系図を作成した二神種章の事績を中心に報告した。次の萬井報告は、今回共同研究で新たに実施された墓地・墓石の悉皆調査と葬送に関する聞き取りをもとにした二神島の葬制・墓石についての全体的報告で、最後の昆報告は、1975 年ごろまで二神島で活動していた豊田造船所（いつも調査でお世話になっている二神系譜研究会常任理事豊田渉氏のご実家）の資料と関係者への聞き取りをもとに、二神島における造船の様子を、当時の写真を紹介しながら再現した報告であった。いずれも、これまでの二神島調査の軌跡と研究成果を踏まえながら、歴史・民俗それぞれの立場から二神島の過去と現在を多面的に照らし出す内容の報告であった。

その後の「二神島調査の意義と展望」と題したパネルディスカッションでは、津田良樹客員研究員の司会のもと、日本中世史研究者で愛媛大学非常勤講師の石野弥栄氏、二神系譜研究会事務局長



写真 2 田上繁氏



写真 3 前田禎彦

の二神英臣氏、長年にわたって常民研の二神島調査にご協力くださっている二神系譜研究会常任理事の豊田渉氏から、常民研の二神島調査にまつわる出来事や思い出も交えながら、その意義や展望について自由に語っていただいた。最後には、特別協力を得た二神系譜研究会会長二神俊一氏、また、最初に二神島調査のきっかけを作ってくださった故二神司朗氏の甥に当たられる二神倫一郎氏のご挨拶を得ることもできた。

今回の講座では、関係者も含めて全体で 216 名の多数の参加を得た。アンケートによれば、二神島に関係する方々以外にも、地元の歴史・民俗に興味を抱く多くの方々にもご参加いただき、概ね好評であったようである。また、会場の後ろでは、二神島や二神系譜研究会の方々の協力を得て、二神島ゆかりの写真を集めたパネル展示を行ったのだが、休憩時間などに皆さんが懐かしげに声を上げながら見入っている様子が大変印象的であった。

常民研の調査・研究の強みは、歴史・民俗をはじめ、さまざまな分野を専門とする研究者たちが集まって、それぞれの知見と方法を生かし



写真 4 昆政明氏の発表





写真 5 関口博巨氏



写真 6 萬井良大氏



写真 7 司会／津田良樹氏



写真 8 パネルディスカッション

ながら特定の地域をフィールドに調査・研究を進めてゆく、創設者渋沢敬三以来のスタイルにあると思う。学際的研究の重要性が声高に唱えられるのとは裏腹に、昨今の各学問分野の研究状況からは学問間の領域を越境することは次第に容易でなくなりつつあり、常民研の共同研究においても、その課題の克服が一朝一夕にすまない深刻な問題であることに変わりはない。そうした中で、あしかけ 40 年近くにわたって、二神島という小さな島を舞台に先人たちによって積み重ねられてきた調査・研究は、歴史・民俗・考古・建築などさまざまな学問分野を専門とする者たちが、それぞれに持ち味を生かして関わることでできた貴重なケースのひとつであったと思われる。それが可能であったのは、その時々で調査・研究を地元で受け入れ支えてくださった多くの方々のおかげであったことは言うまでもない。今回の講座は、地元へ寄り添い一体化して調査・研究を進めていくことが常民研の大きな役割であることを再確認する貴重な機会ともなった。



写真 9 二神島の写真パネル展示

最後になりますが、慣れない地方開催を無事終えることができたのは、二神系譜研究会をはじめ地元の方々のご協力によるものであったことを改めてお礼申し上げます。

(なお、講座の様子は 2017 年 12 月 27 日付け『愛媛新聞』にも掲載された。)